

祝「明治日本の産業革命遺産」 世界文化遺産への登録が決定！

世界文化遺産の登録決定のニュースを聞いたのは、2015年7月5日午後10時37分のこと、仙巖園レストラン松風軒の世界遺産委員会バリックビューイング会場であった。本来ならば2日目である7月4日の発表と思っていたが、思わぬ延期。待機して3日目、本日が最終日。登録延期の可能性もある中、多くの関係者や報道陣たちが息を呑み、見守る中、発表は成された。

過去1例を除き、全会一致で登録されてきた世界遺産。はじめに議長の前会一致で決めたという旨の英語コメントが聞き取れた。投票はない！二つの可能性のみ。登録決定か延期か。英語は分からないと、司会の東川隆太郎さんが笑いを取りながら進行する。必死に少ししまった英語に耳をすますバリックビューイング会場に集まった関係者たち。

あ、決まった？佐藤地ユネスコ大使に向かって他の委員の方々が拍手を送った。

近代日本の発展の礎となった、世界的にも評価される「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産への登録が全会一致で決定した瞬間である。

パブリックビューイング会場は歓喜に包まれた。

ドイツ・ボンで開催中のユネスコ世界遺産委員会は、福岡など8県11市23資産からなる幕末から明治期に造られた産業革命遺産群の登録を決定した。事前調査をした国際記念物

遺跡会議（イコモス）は「西洋から非西洋国家に初めて産業化の波及が成功したことを示す」と世界的な価値を評価し、5月4日に登録を勧告していた。

世界遺産登録は、一つの節目であり、喜ばしいことではあるが、実は今からが始まりでもある。軍艦島など保存に関する課題が山積している地域もある。どこまでを保全の対象にするべきか悩ましい問題であろう。

三菱重工業長崎造船所のクレーンやドックなど稼働中の施設もある。国内の世界文化遺産は通常、文化財に指定するが、部品取換もできないため景観法などで応じていかないとけないだろう。

そして、もっとも大切なのは、今回の遺産群登録をどう位置づけていくのかということ。資産が登録されたというよりも、幕末から維新、そして明治時代の日本の姿、したたかに西洋文明を取り込みながらも、日

本古来から培ってきた技術力や、制度を活かし、進取のものをいったん取り入れながらも融合していく才能が評価された、みなしたほうがいいと思う。

TTPなど、よりグローバルな時代が到来している今日、グローバルな視点のみで、取り入れるだけでなく、身近なものを観、利用し、個性を活かしながら、日本古来からもっている融合する能力で、地域の魅力やオリジナリティを延ばしていき、地域性をしっかりと大切にしたいものである。

愛人と人、地域と地域を結ぶ
（株）アイロード代表
地域交流誌「みちくさ」編集長

福永栄子



関吉の疎水溝



寺山炭窯跡

世界遺産や始良をめぐる 発見ツアーに参加して

歴史好きの方に伝えたい、そして島津義弘のファンならば必ず訪れて欲しい、場所がある。鹿児島市北部に隣接する薩摩の郷、始良市である。市街地から車で約30分。鹿児島空港に行く途中にあり、どちらからもちよつと足をのばすという感覚で訪れることができる。しかし、いずことも異なる風情を残した独特の薫りがする町である。

とにかく田園風景が美しく、稟とした佇まいの町。周囲には竜ヶ城や岩剣城など古来から要衝となつた、自然の山寨を残しており、その合間を川が流れ、豊かな田畑が続く。田舎家のはずの家々には、生垣や門構えやがらしつかりとしていて、質実剛健な野太いイメージが漂う、まさに薩摩藩ならではの風趣にあふれる郷が続いている。

はじめて自分で車を駆って始良市を訪れたときの感動を忘れない。錦江湾に刻々と表情を変える桜島と雨上がりの空を眺めながら、大きな弧を描く海岸端に迫る道を進んでいく。この美しい景観を持つ細い道が、実は主要国道であると確認しながらのドライブ。さすが南九州、自然の地形を守りつつ、道路を作っているのが実にいい。時折、奥の方に霧島から大隅半島が垣間見え、何度、通つても飽きることはない道である。

さて、今回の特集では、鹿児島市に泊まり、この美しい道を通って始良方面に向かうルートを「みちくさ」取材した。この広域周遊ルート発見ツアーの主催は鹿児島県観光連盟で、

これまでも鹿児島市や指宿市、霧島市に宿泊した旅人に訪れてほしい広域周遊ルートの発見とおもてなし整備、そして発信の取り組みを行ってきた。数えてみれば、今年で、早3年目。おかげでたくさんさんのルートやネットワークが掘り起こされた。

別府川 縁つづきの 川みたい



詩人 岡田哲也



別府川は始良の山々から流れ出し、錦江湾へと注ぐ。ビュウ川とも呼ばれる。出水の米ノ津川を見て育った私には、別府川が親戚筋の川に思われる。どことなく似ている。なつかしい。

この川は、蒲生の町で前郷川と後郷川に分かれる。古老たちに言わせれば、マエゴ、ウシトゴだ。

十年前、蒲生で鮎獲りをしたことがあった。潜ってみて、私は川の浅さと川底の礫の細かさに驚いた。大きな石が少ないのだ。さすが始良カルデラの台地を縫って流れる川である。

大きな鮎は、やはり強い瀬や深い淵で育つ。だからあまり大物は望めないと思った。はたしてその通りだったか、数は多かった。しかも出水や人吉の鮎より、肌の色が茶色っぽかった。鮎もまた、その川の砂や岩に似せて、体色を変えるのだと、妙に感心したものだ。

しかし、別府川は、昔はもっと深い川だった。現在、蒲生中学校あたりに、かつては川舟のための港があったという。伊佐、祁答院あたりの米や蒲生のメアサ杉や石材などが、牛馬だけでなく、舟で川口の帖佐の納屋町の港まで運ばれていた。



山田凱旋門

日露戦争に山田村（当時）から従軍した人たちの無事帰還を記念して、山田村兵士会が建設した、日本では珍しい凱旋門。100の石段を登ると奥に招魂社があり、西南の役、日清、日露、大東亜戦争の眠れる勇士1,200柱が祀ってある。国の登録有形民俗文化財。

その結果、南九州市のグリーンテリリズムルートなど、多くのルートが活用されている。

この事業を考えられた背景には、車の移動が楽になり、旅の目的自体が多様化したことも関係している。いわゆる「泊食分離」の旅が多くなり、ホテルなどで囲い込む旧来型の旅のカチでは飽きたらなくなり、旅人も観光客とビジネス客、VFR客（知り合いを訪ねる旅人）などとはつきりと分かれることがなくなり、多目的で地域を訪れるようになった。多様なニーズがある現代の旅では、それぞれが旅の道中に「みちくさ」している。当然、ホテルや観光交通関係者の旅人への対応やおもてなしも変わっていく。

連泊のお客様が楽しむことができる旅、買い物、食事、車を走らせれば、片道が1時間圏内であれば、楽しめる時代に突入した。ビジネスの途中で世界遺産を見たり、歴史や食事を楽しむ人も増えた。当然、周辺地区の魅力を生むも増えた。遊できる観光でのおもてなしを用意しないといけない。旅の醍醐味「出逢い」の旅を紹介できるフロントを育てることも急務である。旅人たちが抱えている多種多様なコンセプトを満たし、自分だけのオリジナルなルート作りをお手伝いしていくことが大切なのである。

特に昨今の旅は、テーマがある旅、交流が旅など、旅の質も高まり、多様性だけでなく、いわゆる「ほんもの」でなくてはならなくなっている。

（編集長より）

ふるさは、幾つか持っていた方がいい。鹿児島県は出水市出身の、私が尊敬してやまない詩人、岡田哲也さんにもこんな心のふるさがあったのだ。まわり道してでも立ち寄りたくなるような想いがある場所を、私もいくつか持っている。「想い人」をそっと胸に秘めておくように、なにげない風を装って、そっと、その道を通ってみたり、たまに近くまで行ったときに無性に寄り道したくなる聖地。人は一つか二つは持っているような気がする。



た。心のふるさと探し。数年前の秋、見つけた私のふるさととは、蒲生の米丸地区の田園風景。そのとき私の心を揺さぶり、ハタハタと、ときめかせた景観は、毎年、9月になると、私を裏切ることなく、必ずやってくる。今年も、来年も、再来年もそこに土や川と共に暮らす人々がおられるかぎり。

ありがたいものである。

地域交流誌「みちくさ」編集長
福永栄子

愛人と人、地域と地域を結ぶ
（株）アイロード代表
地域交流誌「みちくさ」編集長

福永栄子



米丸田園風景

鹿児島に泊まる

祝「明治日本の産業革命遺産」世界遺産登録

鹿児島に泊まる



始良ツアー

推定 樹齢1500年の日本一の巨樹
蒲生の大クス たっぶり あいら探訪！
祝・世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」
寺山炭窯跡と関吉の疎水溝を訪ねる旅

8:15～8:30	鹿児島中央駅西口バスロータリー「薩摩切子塔周辺」集合・出発
9:10～9:40	重富海岸／なぎさミュージアム 見学と散策 重富海岸の説明（浜本麦さん）
10:00～11:30	蒲生八幡神社 日本一の巨樹 蒲生の大クス／蒲生武家屋敷群 散策（始良市ボランティアガイド会）
11:40～12:50	フォンタナの丘「かもう」 ランチ・施設見学
13:00～13:15	山田風旋門 現存する国内唯一の石造りの風旋門
13:30～14:00	龍門滝／龍門司坂 散策（始良市観光協会・加っ歩倶楽部）
14:05～14:20	高倉展望所 加治木市街地と桜島を一望できる絶景スポット
15:00～15:45	寺山炭窯跡 世界文化遺産見学（かごしま探検の会 東川隆太郎さん）
15:55～16:45	関吉の疎水溝 世界文化遺産見学
17:30	鹿児島中央駅 解散

日本でも最も美しい湾 錦江湾

「浪のおりかくる錦は磯山の 梢にさらす 花の色かな」

始良市と霧島市の境界線上にある黒川岬で、島津義弘の三男、家久が詠んだ和歌は、「錦江湾」の名前の由来となったと伝えられている。太古の昔から変わらぬ風景がここには残っているような気がする。

日本一の海域カルデラ「始良カルデラ」からなる錦江湾奥部は、美しい景観と豊かな生態系を合わせ持ち、平成24年3月に周辺のカルデラ壁や錦江湾の眺望も含め、霧島錦江湾国立公園に指定された。

始良カルデラは、約3万年前の巨大噴火でできたもので、直径20kmのカルデラに海水が浸入して湾となったといわれる。

水深200m以上ある錦江湾奥は独特の地形を有し、確認できる魚種だけでも、約一千種あるという未曾有の天文学的な数

福永采子

愛で人と人、地域と地域を結ぶ
（株）アイロード 代表
地域交流誌「みちくさ」編集長

このようにジオパークとしても、生物学的にも、歴史的にも底知れない魅力を持つ始良市は、今後の新しいテーマある旅の舞台となり得る地である。これからもっと「みちくさ」してみたいものである。

なぎさミュージアム

重富海岸の松林の中に佇む館内には、重富海岸や錦江湾奥部の自然、始良カルデラに関するパネル・模型・水槽などが展示されている。世界でも珍しい生態系と自然環境の情報発信、環境学習の場となっている。

住所/鹿児島県始良市平松7675
電話/0995-73-3146
開館時間/9:00～17:00（夏季は18:00まで）
休館日/火曜日・年末年始 ※夏休み期間中は無休
入館料/無料



蒲生武家屋敷群

整然とした石垣と石畳が続く武家屋敷通り。10石取り以上の郷土屋敷には「武家門」の築造が許され、今でも多くの遺構が残されている。中でも御飯屋門は文政9年（1826）に再建された貴重な門で、島津氏の長い治世を支えた外城制度の象徴である。

通りに残る武家門

戦国の九州を席捲した 島津義弘ゆかりの地

島津15代当主、島津貴久の子として生まれた島津義弘は、世に言う島津四兄弟の次男坊。島津中興の祖である日新公の孫で、そのお膝元、伊作（日置市）に生を受けた。島津義弘と呼ばれた義弘の52回におよぶ戦歴は輝かしいばかりで、初陣の地は蒲生氏と覇権を争った岩崎城の戦いだった。義弘は、常に最前線を担い、九州の桶狭間といわれた「木崎原の戦い」（宮崎県えびの市）では少人数で大軍であった伊東軍を破り、九州の関ヶ原と呼ばれた「高城合戦」と「耳川の戦い」で、大友宗麟の軍を破るなど、九州を転戦、獅子奮迅の活躍を見せる。「文祿・慶長の役（朝鮮出兵）」でも奮闘し、関ヶ原の戦いでの敵中突破は、敗軍の将ながらも、見事な退却術で、敗軍にも有名。晩年は、始良市の加治木で過ごすなど、生涯の多くを始良地域で過ごしている。兵士の士気を鼓舞するためにはじめた「くも合戦」や、公共工事における「加治木まんじゅう」のふるまいなど、今でも義弘ゆかりの文化が残っている。

戦国時代、「人をもつて城となす」と考えた島津氏は、各地に散らばる郷土に「麓」と呼ばれる武士の居住地を作り、配備した。今でも鹿児島県のいたる所で、「麓」という地名に出会うが、必ず武家屋敷群が存在する。始良市にも幾つも麓があり武家屋敷群があるが、蒲生郷も例外でなく、8つの馬場と3つの小路から成る武家屋敷群には、今でも多くの武家門が残り、当時の佇まいを感じることができる。要所要所に張り巡らされた半士半農の軍事ネットワークによる、島津氏の治世の巧妙さに触れると感動を覚えるばかりである。

かもう 蒲生八幡神社

蒲生氏の始祖、蒲生輝清が1123年に、生母が手佐八幡宮の宮司家の出身であったことから同宮から勧請し建立された歴史ある神社。江戸初期には島津義弘が社殿を再興、鳥居と額を奉建した。

現在の社殿は、昭和60年に台風の被害で大破した社殿を再建したもの。宝物殿には、国の重要文化財である銅鏡も収蔵されている。

住所/鹿児島県始良市蒲生町 上久徳2259-1
電話/0995-52-9029

フォンタナの丘「かもう」

「健康」を重視した交流施設。源泉掛け流しの温泉、杉や桧を使用したぬくもりのある宿泊施設、からだに優しい料理が並ぶランチバイキングなどが利用できる。

電話/0995-52-1218 定休日/年中無休
営業/産直市場 8:00～20:00
レストラン 11:00～14:00 ※夜は要予約

日本古来の食材で食事療法！

創業34年の割烹・寿司のお店。大将の金城蔵蔵さんが、心をこめて腕をふるう料理は、本格的な寿司から四季に合わせたコース料理、一品料理まで様々。地域の酒造会社、「白金乃露・黒」にびったりな料理を決定する「白金ワングランプリ」で金賞を受賞した「黒豚軟骨の白金焼き」とタカエビなどの新鮮な刺身と黒豚軟骨白金焼きランチがセットになった「刺身と黒豚軟骨白金焼きランチ」は、一押しランチメニュー！

1200円

住所/鹿児島県始良市西宮島1-10
電話/0995-65-0117 定休日/水曜日
営業/11:00～14:00、17:00～22:00

始良

世界遺産や始良をめぐる発見ツアーに参加して泊まる

島津15代当主、島津貴久の子として生まれた島津義弘は、世に言う島津四兄弟の次男坊。島津中興の祖である日新公の孫で、そのお膝元、伊作（日置市）に生を受けた。島津義弘と呼ばれた義弘の52回におよぶ戦歴は輝かしいばかりで、初陣の地は蒲生氏と覇権を争った岩崎城の戦いだった。義弘は、常に最前線を担い、九州の桶狭間といわれた「木崎原の戦い」（宮崎県えびの市）では少人数で大軍であった伊東軍を破り、九州の関ヶ原と呼ばれた「高城合戦」と「耳川の戦い」で、大友宗麟の軍を破るなど、九州を転戦、獅子奮迅の活躍を見せる。「文祿・慶長の役（朝鮮出兵）」でも奮闘し、関ヶ原の戦いでの敵中突破は、敗軍の将ながらも、見事な退却術で、敗軍にも有名。晩年は、始良市の加治木で過ごすなど、生涯の多くを始良地域で過ごしている。兵士の士気を鼓舞するためにはじめた「くも合戦」や、公共工事における「加治木まんじゅう」のふるまいなど、今でも義弘ゆかりの文化が残っている。

戦国時代、「人をもつて城となす」と考えた島津氏は、各地に散らばる郷土に「麓」と呼ばれる武士の居住地を作り、配備した。今でも鹿児島県のいたる所で、「麓」という地名に出会うが、必ず武家屋敷群が存在する。始良市にも幾つも麓があり武家屋敷群があるが、蒲生郷も例外でなく、8つの馬場と3つの小路から成る武家屋敷群には、今でも多くの武家門が残り、当時の佇まいを感じることができる。要所要所に張り巡らされた半士半農の軍事ネットワークによる、島津氏の治世の巧妙さに触れると感動を覚えるばかりである。

創作家具・陶器・雑貨のお店 (株)岡家具店

県道42号沿いにある家具専門店。店内には、オーナーの岡さん手作りの家具や個性的な雑貨、器が並び、家具のオーダーメイドから時代家具の再生、リフォームまで親身になって相談に乗ってくれる。

住所/鹿児島県始良市蒲生町上久徳2811-1
電話/0995-52-0219
営業/9:00～19:00 定休日/第3日曜日

不老仙の材料

玄米・胚芽表皮・大豆・ごま・昆布・椎茸・はと麦・よもぎ・すぎな・大麦・カルシウム

住所/鹿児島県始良市池島町27-16
電話/0120-65-6040
営業/9:00～17:30 定休日/土・日曜日

加治木

並木の街道や一里塚の設置、島津氏は独自の整備を整備していく。それにあわせて宿場町や、河口に広がる浦町や交易の拠点になる野町が発展する。特に始良市は、北に肥後街道とつながる「大口口筋」、東に日向、大隅へと続く「東目筋」という、薩摩街道における2つの筋が重なる交通の要衝として栄えた。中でも薩史の主要街道と呼ばれた「大口筋」は、鹿兒島市の鶴丸城下を北上して、現在の始良市、霧島市、湧水町を経て、伊佐市大口に到る道で、道中山道には、白銀坂や龍門司坂など、国指定の史跡が残り、一大歴史ロマンを感じれる道となっている。また、明治期の近代化に大きく尽力した、加治木港と山ヶ野金山を結ぶ輸送路「金山橋」など、中世から近世における、この地の人々の文化度の高さは、日本はおろか、世界でも先進的だったのではないかと思う。